



天文月報 100 巻によせて

日本天文学会理事長 祖父江 義明

天文月報は、1908 年第 1 巻創刊以来、第 100 巻を迎え、日本天文学会百年の歴史を記してきました。そして 2008 年には学会創立 100 周年を迎えます。大慶の至りです。

日本天文学会は、天文学の進歩と発展を目的として、年会、PASJ、天文月報の発刊 3 大事業を行ってきました。なかでも年会と月報は良い相関をもって、順調に発展しているのはいへん喜ばしいことです。

天文月報は、近年とくに充実してきました。年間頁数は 10 年で倍増の増加傾向にあります。体裁はいへん好ましく、厚さもあり立派になりました。背表紙がつき、本棚に自力で立つようになったのは画期的なことといえるでしょう。内容についても豊富で、たいへん読みやすくなり、数々の工夫と努力を惜しまなかった歴代の編集委員会に、改めて感謝し、敬意を表したいと思います。

発刊当初の天文月報を読み返してみますと、頁数こそコンパクトではありますが、その内容は実に重厚で、かつ高度だったことがわかります。国際誌としても十分に通用すると思われるほどです。寄稿者の顔ぶれがまた、天文学界の大御所大先達が目白押しで、歴史の厚さを感じさせて圧巻です。幸い、編集委員会の努力により、天文月報全巻が pdf 化されて公開される予定ですので、いずれ簡単に読めるようになります。皆さんには、歴代の先達が記された月報記事をぜひご覧になることをお勧めします。学会 100 年の歴史が、いまの私たちの研究や活動の源になっていることを改めて思い起こし、これから書かれる論文の引用文献を、彩りあるものにしていただければありがたいと思います。

天文月報と共にわが国の宇宙科学の国際バロメータである学会誌 PASJ も、月刊化に向けて準備を始めました。年会や月報発表のめざましい増加に連動して、天文学の研究成果を、欧米に頼り切らず、自らの学会誌で発信していくことが目標です。

そのためには会員が、自国の学会を愛し育む必要があります。その意味において、天文月報 100 年分に凝縮された日本天文学会の歴史は貴重です。全 100 巻を、斜め読み、拾い読み、題読みでも良いので見渡し、恩師、その恩師、そのまた恩師ら、先輩が歩んだ道と労苦の数々を概観してみるのはどうでしょうか。天文月報を通して、日本の科学史における自身の立場を認識すれば、研究論文の過度の流出にも歯止めがかかり、わが天文学会から世界への科学成果の発信が、より充実するのではないかと期待する次第です。